

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 猪股祐介

提出年月日 2015年5月6日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 「満洲国」に対するソ連軍侵攻後の「中国残留婦人」と「戦時性暴力」の表象におけるホモソーシャルリティの歴史社会学的研究

英文 Historical Sociology of Homosociality in Representation of Japanese Women Left in China and Wartime Violence

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

本研究の目的は、「満洲国」（以下括弧省略）崩壊後のソ連軍侵攻にともなう「戦時性暴力」と「中国残留日本人」の形成過程を明らかにすると同時に、敗戦直後から現在までのそれらの表象を明らかにすることである。そのねらいはソ連軍侵攻後の満洲移民の被害体験から満洲移民事業の矛盾を剔出するとともに、同じ被害体験でも「戦時性暴力」と「中国残留日本人」では戦後日本での表象が大きく異なることに着目して、「戦時性暴力」が「戦争被害体験」を基盤とする「戦後日本のナショナリズム」形成から「徹底的に」排除されてきたことを、問題の俎上に乗せることである。

「中国残留日本人」は 13 歳を境に、13 歳以上を「中国残留婦人」とし、12 歳以下を「中国残留孤児」と呼ぶ。「残留孤児」の帰国は日中国交正常化を経て、1980 年代の訪日調査で進んだが、「残留婦人」は「自分の意志」で留まったとみなされ、その帰国は進まなかった。

「残留婦人」の排除とソ連軍侵攻後の「戦時性暴力」の排除には通底するものがあるのではないだろうか。それは戦後日本のナショナリズムがホモソーシャルなナショナリズム、すなわち「男同士の絆」をもとにしたナショナリズムであり、そこでは「自らの意志」で中国人と結婚した「残留婦人」や「自国民」女性が強姦された「戦時性暴力」は、「男同士の絆」を傷つけるものとして排除されたのではないだろうか。以上の仮説をもって、戦後日本の「残留婦人」と「戦時性暴力」の表象を分析することで、両者に通底する「戦後日本のホモソーシャルリティ」を研究する。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

猪股祐介. 2014. 「中国残留日本人の歴史と現在」. 『なぜ今、移民問題か（別冊環）』, 20: 336-340.

### 【成果の概要】（800字程度）

敗戦直後、「残留日本人」の問題は、新聞誌上において、「満妻」と呼ばれる「中国人男性と通婚した女性」に関する記事によって占められた。そこには自国民女性を旧植民地男性に「略奪」されること、それにより日本人男性同士の絆が壊されることへの恐怖があることを明らかにした。そして敗戦直後の「残留婦人」に対する言及の多さと対照的に、日中国交正常化以降、1970年代から中国残留婦人の強行帰国により社会問題化した1990年代初頭に至るまで、「残留婦人」が問題にされてこなかったことに着目し、「自らの意志」で中国人と通婚し、中国に「留まった」女性を排除することで、日本人の「男同士の絆」を守ることが企図されたことを明らかにした。簡潔に言えば、「日本人よりも中国人を選択した」女性の帰国は、日本人男性にとって屈辱であり、その帰国は忌避されたのである。

このことは日本人の「男同士の絆」＝ホモソーシャルな関係の優越という点で、ソ連軍侵攻後の「戦時性暴力」に対する敗戦直後の言及とその後の「沈黙」と共通する。「戦時性暴力」については敗戦直後に言及があったものの、その後はその存在が示唆されるのみで、それ以上の記述はなされず、長年「沈黙」が続いてきた。このことから「戦時性暴力」が「残留婦人」以上に日本人の「男同士の絆」を脅かすものであったことを明らかにした。

それはすなわち、「戦時性暴力」は「残留婦人」と異なり「日本人女性」に帰責できないことや、「戦時性暴力」にあった引揚女性の存在が、戦後日本の日本人の「男同士の絆」により深刻な脅威であった。それゆえ「残留婦人」よりも「徹底的に」隠蔽された。敗戦直後「満妻」がクローズアップされる背後で、引揚女性の「引揚港における中絶」が行われていたことは象徴的である。

そして満洲移民研究や「中国残留日本人」研究で、「残留婦人」や「戦時性暴力」が注目されなかったことから、これら学知においてもホモソーシャルな関係が貫徹していることが窺えるとした。

### 【通信欄】